

無距離化する音楽・文化の社会学のための 「文化」の暫定的定義

— 自分の声で歌え/ディスタクシオンから、
バイオダーウィニズム的救済（悟り）へ？ —

桜 井 芳 生

【はじめに】

非音楽的な諸要因に影響されて、今日、音楽、とくにポピュラー音楽が変容しつつあると筆者は見通している。

その見通しは、さまざまな一つ一つは些細な変化にしかみえないような諸現象であるが、それら諸現象が、相互作用しあって大きなうねりをつくりつつあるとのものである。

それらの諸現象をもたらしているおもな原因は、つきなみだが、第一には、社会のIT化、とくにネットワークとPCの普及・安価化、である。第二には、これもつきなみだが、いわゆるグローバリゼーションによる、いわゆる先進国における、物品の安価化である。

これらは、ひとつひとつばらばらの現象であって、概念的に一つに集約すべきかどうかはわからない。しかし、暫定的仮説として、「音楽の無距離」化が進行している、と考えてみたい。

本稿で、照準する諸現象は、いまだ萌芽的なものである。そうであるがゆえに、記述も、散発的なものになるが、現段階で、記録・論述することはそれだけの価値があるとおもう。試論・序論として、容赦いただきたい。

【ポピュラー文化における「音楽」と、その他】

私事で恐縮だが、私は勤務大学で、現代メディア文化論の教師をしている。現代のメディア文化にとって、ポピュラー音楽は、非常に大きな意義をもつ事象といえる。少なくとも、無視することは望ましくない事象といえるだろう。それと関連して、卒論指導をする学生が、ポピュラー音楽を、卒論のテーマに選択することも、少なくない。しかし、(井手口ら) ごくわずかの例外をのぞいて、参考にあたいする先行研究、学生に推奨するにあたいする研究アプローチは、ほとんど存在しなかった。本稿は、そのような、「永年、指導学生に満足に応えることのできなかつた、私」からの「宿題への回答」(の端緒にすぎないが)の試みであるともいえるだろう。

【「文化」の暫定的定義】

議論するにあたって、「文化」を暫定的に定義することを試みてみよう。もちろん、ひとは、ある言葉を、ほとんど自由に定義し、ほとんどの場合、プラグマティックに、当面の便宜に利するように定義するのがいいだろう。

ここでも、私は、「文化」という語を、自分の議論の便宜に利するように定義する。しかし、以下私が述べようとする「文化」定義は、たんに、プラグマティックなものにすぎないとは考えない。なぜなら、以下私がのべる「文化」定義は、あまり類似するものがなく、また、進化心理学の影響をうけている

からだ。

進化心理学というと、たんなる心理学の一分野であると思われてしまうかもしれない。しかし、それは、ダーウィン生物進化論の知見をそのまま、人間の心理・行動にあてはめて、仮説を構想する心理学であり、現在の自然科学界でダーウィン生物学が正統的な地歩をしている以上、人間の行動・心理に関してもダーウィン生物学の知見を前提にせざるを得ないと筆者は考える。そうでありながらも、このような人間理解は、とくにいわゆる人文科学においては、かなり軽視されている。がゆえに逆に、このような視点は、大きな正しさと大きな認識利得とを期待できる。これが、この方向の延長線上での本稿の「文化」定義をたんに恣意的なものを超えるものとして、本稿が唱導する所以である。

(非常に多くの頻度で誤解されて閉口しているのだが、俗流「進化」論の、イメージ・アナロジーを、そのまま社会理解にあてはめた「社会ダーウィニズム」とまったくことなるものなので注意してほしい)。

では、私の文化の定義を述べよう。すなわち：

「文化とは、ヒトの行動・表象のうちで、なんの腹の足しにもならない、のに、望ましいもの、価値あるもの、として評価されているものの謂である。」

ヒトは、かならずしも自分の腹の足しにならないようなことに、手間暇カネなどの資源を投入する。これらの事象のうち、だれかから、価値あるものとされていることを文化あるいは文化的なるものと呼ぼうというわけだ。

ダーウィン生物学ならびに進化心理学的には、個体の生存に直接利することのないときに、個体の生存の可能性を減ずるようなことに、生物個体は資

源を投入することがある。それはなぜか、という問題と、以上の発想は共鳴している。ダーウィン生物学ならびに進化心理学の回答は、それらはほとんど「性淘汰の産物である」というものだ。すなわち、ライオンのたてがみや、オナガドリの長い尾のように、それ自体その個体の生存に資することなく、資源の浪費にみえるようなことが、なぜ、生存・再生産の進化史のなかで、残存し発展してきたのか。ダーウィン生物学の回答は、それは、「異性から選ばれる」という「性淘汰において正の機能をもっていたからだ」ということになる。なぜ、それでは、そもそもその異性はそのような特性を配偶者選択において選好したのか、という問が生じる。これにたいしては、このようなたてがみやながい尾が、適応度指標の機能を担えたからだ、という回答になる。すなわち、直接は観察できない配偶者候補の、隠された資源の豊かさ（健康その他）のシグナリングとして機能してきたからだ、というわけだ。

私の文化理解も基本は同じであると考えている。ヒトという名の動物も、一見すると、なんの腹の足しにもならない、彼（女）自身の個体の生存の可能性を高めるに資するようには見えない行動をする。

なぜ、こんな行動をするようになる血統が、進化史のなかで、生き延びてきたのか？ もちろん、さまざまな原因がありうるだろうが、上の文脈からしてもっともありそうな回答は、そのような行動が、上記の適応度指標の顕示機能を果たし、性淘汰が働いたからだ、ということになる。

【ミスマッチ・セオリー】

ただし、いわゆる「有史以来」の人間を考えるさいには、すこし、修正が必要だ。現在の人間においても、ヒトの遺伝的遺産は、「約十万年から一万年前のあいだにおこった進化的な変化」(Nesse・Williams 1994=2001:204)の

なかで獲得した遺伝的特性が、大部分を占めている、と考えられている。「過去一万年のあいだにも、自然淘汰によって人間は多くの小さな点で変わってきたが、これは、進化的な時間の尺度ではほんの一瞬である。」(Nesse・Williams 1994=2001:204)

このように、人間の進化的特性の大きな部分を形成した環境のことを、現代人間進化論では、「進化的適応環境 (EEA: the environment of evolutionary adaptedness)」と呼ぶことが多い (Nesse・Williams 1994=2001:204)。

このような「石器時代の状態に適応し」(Nesse・Williams 1994=2001:204)た遺伝的特性が、現代社会の環境のもとで、ヒトの行動に影響をあたえている。したがって、「石器時代の環境のもとで、適応度指標として性淘汰のなかで生き残ってきた」遺伝的特性がヒトに振舞わせる行動が、現代社会においても、適応度指標として性淘汰のなかで機能をもつとは限らない。私は、ネシー・ウィリアムズのように、このような「私たちの体の設計と現代の環境との間のミスマッチ」((Nesse・Williams 1994=2001:ii) に着目するアプローチを行う。

上で述べた、文化の社会学における、「文化」の暫定的定義とは、文化の社会学においては、個体の生存に直接資するのではないような行動に、注目するのがよろしい、という趣旨をふくんでいる。

そしてまた、そこには、そのような「文化」行動の多くは、(1) 上記のような「進化的適応環境 (EEA) においては、性淘汰における適応度指標の顕示機能を果たした」がゆえに獲得された遺伝的特性に由来するのだが、(2) 「しかし、EEAと状況の変化した現代社会においては、性淘汰における適応度指標の顕示機能を果たしているとか限らない」(ミスマッチ仮説) のだ、と

いう二つの仮説をふくんでいることとなる。

(注記) このような「文化」の定義は、進化霊長類学や、文化と遺伝子の共進化論、などという「文化」とは、かなり異なっていることに注意が必要だ。それらがいうところの「文化」とは、「人間行為の蓄積全体のうち、遺伝ではなく社会的にされる部分」(Mitchell 1968=1987 『新社会学辞典』:72 「culture(文化)」)という、おもにアメリカ文化人類学で、使われてきた定義に近い。

もちろん、このような用語法の伝統に棹差してもいいのであるが、「現代文化としての音楽」などといったばあいには、本稿の定義のほうが、便宜が高いとおもうのである。そして、「文化の社会学」を試行するかなり多くの場合でも、そうであると見通している。

本稿における「文化」定義にふさわしい知的伝統がまったくないかというところでもないと見通している。たとえば、ジンメルによる、文化とは「より多くの生 (mehr-Leben)」ではなくて「生より以上のもの(mehr-als-Leben)」としての客観的・精神的形象であ(田中義久1988 「文化」:781 『社会学事典』)る、という文化理解と一脈通じるものであると私は見通す。くわしくは、別途論じたい。(注記、終わり)

【現代若者文化における音楽】

このように、人間の行動・社会を理解するうえで、「文化」現象は非常に興味ぶかい。さらに指摘したいのは、現代の若者文化を観察するうえで、音楽が、この「文化」的諸現象のなかでも大きな地歩を占めているということだ。文学やゲームは、かぎられた層のみおこなっているといえる。読書はすくなくとも日本においては、若者にとって普遍的な文化行動とはいえない。動画(映像)視聴は、大きな層において担われている。それに並ぶものとして音楽享

楽は大きな地歩を占めていると言えるかもしれない。あとは、女性においては、服飾と化粧、男性においては（直近においては下火だが）自動車と単車、が、屈指にあたいするといえようか。

そのような「音楽文化」であるが、いままで、「文化」学の視点で分析されたことはあまりなかったといえるだろう（上記の例外をのぞいて）。

本稿は、現代文化において、音楽をめぐるさまざまな、「距離（へだたり）」が、小さく・無化しつつあるのではないか、と論じる。とくに、そのなかでも、音楽を作る者（作曲する者・演奏する者）と、聴く者との距離がそうなりつつあるのではないか、と論じる。

【TABエディターと五線譜】

音楽を作る者との距離に関連するものとして、「楽譜」が存在する。「耳コピ」（音をきくだけで、楽器で楽曲をコピーする、あるいは、採譜する）という方法もあるが、それにはある程度のスキルが、必要である。楽譜があったほうが、演奏が楽なのはいうまでもない。

昨今のIT化のながれのなかで、多くの「著作物」が、その「著作権」の防御を困難にしつつあるが、楽譜は比較的ガードが固いコンテンツであるといえる。オンライン上で、著作権のある楽譜が、ただで「転がっている」ことはまれである。おそらく、それも原因して、人気アーティストの楽譜集冊子は、現在においても比較的高価である（CDよりも高い場合もある）。

このように比較的ディフェンスが固かった「楽譜」であるが、これも抜け道が生まれてしまった。

読者のなかには、TAB譜というものをご存知のかたも多いだろう。とくにギター（アコースティックギター・エレクトリックギター）を演奏するときにつかう譜面で、6線譜となっており、それぞれの横線が、「(第一～第六)弦」を示し、その線上に、フレット番号を記したものだ。これをみれば、どの弦のどのフレットをおさえればいいかが、一目でわかる。

ご存知の方も多いだろうが、ギターにおいては、「一つの音を、複数の種類の押さえ方で、だす」ことができる。「同音異弦」が可能なわけだ。であるがゆえに、五線譜をみたからといって、弦のおさえかたは、一意に指定されるわけではなく、そうであるがゆえに、TAB譜があると好便なわけだ。

しかし、また、であるがゆえに、ある一つの五線譜にたいして、それに対応するTAB譜は一意に決まらない。TAB譜作成者（演奏者）の「創作」物として、TAB譜が生まれる。

多くのアマチュアのギタープレイヤーが、TAB譜のない楽曲を弾こうとすれば、TAB譜ができてしまう（それを採譜するかどうかはケースバイケースだが）、それをみずからの「著作物」として販売することも可能だが、コストのわりには見返りはすくないだろう。それよりは、世界中のギター仲間に公開してしまったほうが、「リスペクト」されるかもしれない。「お互い様」でもあるし。そのような「TAB譜公開サイト」がオンライン上にはいくつか存在する。大きなサイトにはそれこそ、無数のTAB譜がアップロードされている。有名な曲は、ほとんどTAB譜があり、一つの曲に何種類のTAB譜が、載っていることも普通である。ここまでは、とくになにも問題がない。

他方、現在、TABエディターという便利なソフトがある。TAB譜を書く際のワープロのようなものだ。綺麗にTAB譜をかけるし、TAB譜をかけたあとでは、「模範演奏」させてみることもできる。この種のソフトも数種類あり、

無料のものも存在する。

このTABエディターでつくったファイルを上記の「TAB譜公開サイト」にアップロードすることもできる(すでにされている)。このファイル自体には、TAB譜の情報が電子化されているだけで、五線譜の情報が載っているわけではない。したがって、こうして、TAB譜の情報を流通させることは、もとの五線譜の著作権を侵害はしていない。

「五線譜→TAB譜」の対応は一意ではない、といった。五線譜上の「同音」が、TAB譜上では、「異弦」で弾くことのできるからだ。しかし、逆の「TAB譜→五線譜」の対応は一意である。あるTAB譜があたえられれば、それに対応する五線譜は一つしかない。

しかし、上記のようにTABエディターは高性能である。「TAB譜→五線譜」の変換など、ほとんどデフォルトで瞬時にできてしまう。

このようにTAB譜を媒介にして、五線譜が流通しうるようになってしまっているのである。

しかし、翻ってかんがえてみると、このような構造はいまにはじまったものではない。

そもそも、「耳コピ」からして、同じ構造であった。

その後、MIDIが登場した。原譜→MIDIの関係も、上記の「五線譜→TAB譜」の関係と同様だ。「原譜（五線譜）→MIDI」は、一意に対応しているわけではない。しかし、逆方向は一意となってしまう。

そして、じっさい、所与のMIDIファイルを、五線譜に変換するソフトも存在する。

ただ、そんな、「マニアック」なことをするひとはあまりいなかったの、「社会問題」化しなかったのだろう。

しかし、上記の「五線譜 \leftrightarrow TAB譜」の変換は、より多くの人利用可能（利用している）である。

が、しかし、また、TABエディターをつかっている人が、また、一般多数となっていないがゆえに、これは、「社会問題」としては認知されていないのかもしれない。

しかししかし、すでに論じたようにこれは、構造的には、「五線譜 \leftrightarrow TAB譜」変換問題にとどまるものではない。

どのような著作物の形態であろうと、それが、流通・放送さえされてしまえば、その著作物のオリジナルコードを再構成できてしまうのである。

これは、今後さまざまな領域でも、廉価化・容易化していくのではないか。

【MIDIとDAW】

パソコンまわりの環境の変化が音楽作成に大きな変化をあたえていることはいままでもない。

まず、いわゆる「MIDI」による音楽製作についてである。これについては、もはや、ほぼ無料化したといってもいいだろう。

もし、あなたが、通常のウィンドウズPCをつかっているなら、無料のMIDIシーケンサーソフト（MIDI規格で音源などを操作するソフト。簡単に

直感的にいえば、「音のワープロ」を、フリーでダウンロードできる（Dominoなど）。

MIDI自体が、もはや、「枯れた」規格であるがゆえに、DominoなどフリーのMIDIシーケンサーは、もはや、有料ソフトに遜色がない（というかすでに有料シーケンサーはほとんど流通していないだろう）。

しかし、ITによる音楽製作の中心はもはやMIDI関連環境ではなく、DAW（デジタル・オーディオ・ワークステーション）である。これは簡単にいうと、旧来の「録音スタジオ」の「機材システム一式」を、パソコンの上に再現した「バーチャルスタジオ一式システム」のようなものだ。まあ、イメージとしては、MIDIシーケンサーが、「音のワープロ」だとすると、こちらは「音楽のフォトショップ」（いやそれ以上）といったところだろう。

Perfumeで、有名になった、中田ヤスタカは、自宅に専用の「スタジオ」をもち、DAWによって、独力で、音楽製品を完成させている。ただし、彼のスタジオには、「録音」コーナーもあって、「生音」（たとえば、Perfumeの各メンバーの声とり、中田の所属するユニット、capsuleのボーカル、こしじまとしこの声とり、などはそれをつかっているようである。）

また、彼のスタジオ紹介の写真を複数みると、エレキギターの実物がおいであったり、エレキベースの実物がおいであったりする。

さすがの中田のDAWでも、「ヒトの声」と「エレキギター（ベースも）」は、生声・生楽器をつかって、それを加工しているようである。

（しかし、後述するように、この「声」「エレキギター」の特殊性も、特権的なものではなかった！）

【一万5千円のキーボードと「添付のDAWソフト」】

当初、私は、この中田ヤスタカの作業システムをみて、「やっぱり、プロはちがうなあ。こんなのちょっとやそっとではつukれないなあ」と感じていた。

が、ちょっとおもいたって、著名なシンセサイザーメーカー、ローランド（cakewalkブランド）の1万5千円ほどの、USB対応キーボードを購入してみた。

これは、50鍵ほどのピアノ配列のキーボードで、USBコネクタをつうじて、PCと接続するものだが、それだけでは、あるいはそれをPCにつなぐだけでは、音もなにもでないものである。PCがわに対応するシステム（すくなくとも、MIDIシーケンサーとMIDI音源）が、ないと、無用の長物だ。

実際には、上記のように、Dominoなど、フリーのMIDIシーケンサーが簡単に入手でき、デジタル音源は、ウィンドウズがインストールされているPCならば、OSとともに、すでにインストールされている。ので、音を出すだけは可能だ。

が、メーカー側としてはそれだけでは販促に不十分とかがえているのか、この1万5千円のキーボードには、いくつかのソフトが「同梱」されていた（以下に言う「cakewalk production Plus Pack」）。

藤本・大坪によると

「、、、既存のcakewalkブランド製品の多くに、cakewalk production Plus Pack というDVD-ROMがバンドルされるようになったのだ。、、、実はこれがとんでもないほどの機能、可能性を秘めたソフトとなっているのだ。このソ

フトだけでも数万円以上の価値があるといっても過言でなく、これをインストールすれば、すぐに本格的な音楽制作を開始することができるのだ。(藤本・大坪:006)」

という。

内訳は；

DAW本体ソフト

ソフトウェア「総合」音源

ドラム音源

ソフトシンセ音源

以上である。とくに上記の一番目と二番目が大きな便宜をもたらす。

この「Plus Pack」にはいつているDAW本体ソフト(SONAR 8.5 LE)は、すでに、DAWとして大きな実績信頼を得ているSONARのエントリー版であるが、いわゆる体験版でなくて、これだけで（少なくとも私のようなものには）十分すぎる機能が用意されているバージョンである。

さらに、このSONAR 8.5 LEを利用できることは大きな便宜をうむ。DAWの世界では、DXiとVSTiという二大「プラグイン」規格がある。SONAR 8.5 LEは、この両者に対応している。そして、これらの規格に対応したプラグインソフトは、数えられないほど、世界中に、フリーソフト（もちろん、有料のものもあるが）として、存在流通している。SONAR 8.5 LEをつかえることで、おそらく数百以上存在している、フリーのプラグインソフトを無料で自由に利用することができるわけだ。

上に同梱されていたソフトウェア「総合」音源もたいしたものので、cakewalkブランドの複数の音源ソフトのなかから、利用頻度のたかい、約150の音色をプリセットとして用意したものである。

以上のように、たった、1万5千円の、キーボードを購入するだけで、中田ヤスタカの専用スタジオに匹敵（は、さすがにしないが）しないともいえない（少なくとも素人にはその違いがわからないような）環境が入手できてしまうのだ。

【値段】

値段にこだわっているようで恐縮だが、本稿にとって、日本円だてでの価格は、非常に重要な意味を持つ。いわゆる、「経済のグローバルゼーション」との関連においてである。

前述のローランドのキーボードであるが、裏をひっくり返すと、made in china と書いてある。上述の「添付ソフト」も、じつは、それ本体では、すでに販売がすすんでおり、察すれば「減価償却がすでに済んだ」商品といえるかもしれない。

プラグインソフト、あるいは、DAWソフト本体そのものの普及をめぐって、各ブランドは、「プラットフォーム競争」をしているといえる。すなわち、DAWにおいても、圧倒的シェアをもつブランドが出現すれば（いまだそれは出現していないようだが）、それは、当該マーケットの全体を獲得できる可能性がある。

というわけで、DAWにおいては、ハードウェアとそれの「おまけ」でついてきているソフトの廉価化が、急速に進展している。

いまや、PCがあれば、それにくわえて、一万5千円のキーボードを購入すれば、（それにバンドルされているDAWソフトパッケージをつかって）、数

年まえのプロなみの性能のシステムをそろえることが可能になっている。

【made in china】

made in chinaに類する現象は、現在の音楽製作では、おおきな要因となっている。読者は、「8000円のエレキギター」が、弾く値するものだとおもうだろうか。

「クラシックロックとエレキギターが好きなおやじのブログ。」の記述が、とても、興味ぶかい「証言」となっている。

このブログ主はいう。

「エレキギターは5万円以上しないとダメだ。

安いギターってのは、、、、、、コピーモデルとも言えないようなジャンクなシロモノでしかない。

ながいあいだ、ずっとそう思っていました。」

そんな彼が、あるオンライン上の激安ギターのレビューサイトをみて、すこし考えが変わってくる。

「もしかして今どきの激安ギターは、バカにできないのかも？」と思うように。

どうせ、家でしか弾かないのだから、一万円もしないのだから、試してみる、か、と。

そんな軽い気持ちでネットからお取り寄せしたのが、××××（ブランド名）というストラトタイプです。」

「これがなかなか弾きやすい。それまで使ってたストラトは54年のコピーモデルだったんで、ハイポジションに行くほど指板の曲率がきつくてたいへん。

でも××××はかなりフラットな指板なんで、今まで弾きにくかったフレーズがすんなりと弾けました。」

「それまでギターは最低でも5万円以上じゃないとダメ！なんて思ってたのが、こりゃスゴいや！に一転した瞬間です。」

そんな彼だが、「赤メタリック」のもののかったために、彼の娘にそのギターを占領されてしまう。

しかし、、、

「ところがこの美しい赤メタリックの××××、予想どおり中学生の娘にゲットされてしまったため、オヤジは2本目の××××を購入することに。」

「これがまた弾きやすい太さで好みです。

2本目の××××を購入してから、メインギターは20数年前に8万円で買った54年モデルの国産ストラトから、本体価格1/10のメイドイン・チャイナになりました。

激安ギターって言っても、ホントによくできてます。時代は変わりましたね。」

つまり、結局かれは、一万円弱のメイドイン・チャイナのエレキギターを二本もかってしまい、両方とも気に入って、「20数年前に8万円で買った54年モデルの国産ストラト」よりも、重用するようになってしまったのだ！

【VOXの3000円 マッチ箱様の「けいおん」ガジェット】

じつは、筆者（桜井）も、上記のブログ主とおなじブランドのメイドイン・チャイナのエレキギターを二本もかってしまった。もちろん、まず、一本購入して、気に入ったので二本目（ピックアップの仕様がすこしちがうもの）

を購入したのだ。筆者がエレキギター（ギターも）をはじめたのは、生涯でこれがはじめてである。

さらに、興味深い経験を筆者はすることになった。

VOXというメーカーをごぞんじだろうか。おそらくはMarshallと並ぶとあってよい、エレキギターの「アンプ」の老舗メーカーといえるだろう。ヴィンテージもののアンプだと、一台、20万円とかするようだ。

そのVOXが、3000円ほどで、「ヘッドフォンアンプ」というものをだしている。ちょうどヘッドフォン用のプラグにマッチ箱程度の箱がじかに接着されているような形態だ。これをそれぞれギタージャックに挿し込み、マッチ箱の別の面にあるミニジャックにヘッドフォンのミニプラグを挿し込むと音が聞こえる仕組みである。このガジェットには、スイッチやつまみが複数ついていて、ボリュームのほか、ゲイン（歪みを調節できる）や、ディレイ（エコー）をつけたりすることもできる。

この製品シリーズは、昨今はやりの「けいおん」のキャラクターがついたバージョンもあるのでご愛嬌である。

それで、この3000円のアンプと8000円のエレキギターをつないで、拙いながらも演奏して、録音してみた。

すなわち、上記8000円メイドイン・チャイナのエレキギターのジャックに、3000円のアンプ（といっても、プラグが飛び出たマッチ箱のようなもの）、そのアンプにミニプラグと通常の細いコード（マニアは、「コード」にもこだわって、太い・高いものをつかうのだが、）をつなぎ、直接上記のDAWソフトの入ったPCの音声ジャックに接続した。（接続もまた、いろいろと、価格のす

る変換アダプターをつないだりと方法があるようだが、今回は、あくまで「ジカつなぎ」。

これを、「初音ミク」に歌わせた私のつくった曲、といっても、三秒ほどだが、に同期させて、エレキギターを「生演奏」して、DAWで、デジタル録音した。

これを、そのDAWソフトで、「ミキシング」（ミクとエレキが一緒にきこえるようにする）し、流通力のある（どんな環境でもきこえるように）MP3フォーマットに変換した。知り合いの学生などにきいてもらった。

まあお世辞だろうが、「これ本物のエレキですか??」とか「先生の生演奏ですか？ すばらしいです！」といった反響や、じっさいに、ベースギターをやっている学生に音（演奏は下手なのはわかっているのに）についてきいてみると、「値段の割に音質は全然悪くないなと思いました。流石、小さくてもVOX…。」

との評価であった。

気を良くして、

上記のDAWをつかって、おなじ拙曲の「ストリングス版」（弦楽合奏）もつくってみた。これは、ミクの歌声に同期せず、リズムも平板であったせいか、反響はなかった。やはり、デスクトップミュージックといっても、そうそうは簡単（てまひまかからない）なわけではない。

【Marshall,おまえもか！】

前記の学生さんの「流石、小さくてもVOX…。」の文言に注目してほしい。いや、VOXだけではないのだ。

VOXにならぶ（というか、より著名な）、エレキアンプメーカーに Marshallが、ある。Marshallよ！、おまえもか！、なのだ。

Marshallのアンプ・スピーカーセット、ちょっとしたヴィンテージものなら、一式で、100万円ほどだろうか。これが、、、

このMarshallのミニアンプが、3799円で販売されているのだ。（次図）



上のように高さ15cmほどで一見おもちゃだが、Marshallのロゴがしっかりはいっているところがちゃっかりしている。Marshallの純正で、もちろん、ちゃんと音もなる。ひっくりかえして裏をみると、Made in Vietnam とかかれていた。

が、このはなしにはつづきがある。

どうみても、上のMarshallのミニアンプとまったくべつものとはおもえない、ノーブランドのミニアンプが流通しているのである（次図）。しかも、



1390円で！

上の二つは、たしかにまったく同じかたちであるとはいえない。しかも実物を見ると、若干大きさもことなっている。

両者を実際に見比べてみよう。



以上のように大きさは微妙にことなっている。

ただし、左のMarshall純正の方は、上下二パート分かれているにみえるが、これはたんに飾りで、よくしられたMarshallのアンプスピーカを「積み上げた姿」をたんに模したものに過ぎない。「つなぎ」部分は、ちょっとくぼんでいるだけで、電気回路上の意味はまったくないと思われる。

正面部分においては、とくにつまみ類のあるコントロール部分が、酷似している。ただし、明確な違いもある。



上が、Marshall 純正である。



これが、格安品。よくみると微妙に異なっているが、偶然とはいえ近い類似度である。



上は、両者を並べてうえから撮ったところ。両者ともに、フェイクの「手
提げ把手」風のかざりがついている。その把手の長さは、まったく同じで、
帯の「シワ」（でこぼこ）の数もまったく同じであった！



上は、背面同士の比較。大きさは上記のように異なるが、上部真ん中に大
きな「ベルト用クリップ」のようなものがあり、その左右にブラインド風の
換気口、中心下部に、9V電池のボックス、そのボックスのふたの仕組みと形
状がうりふたつである。

この格安品の裏をみてみると、そこにも、made in china と記されていた。

【エレキギターの「パワーコード」弾き】

で、エレキギターをどうひきはじめるか？ この種の「芸事」は、「初め」が肝心である。「初めがもっとも、敷居がたかい」。野口悠紀雄(1993)が、タッチタイピングによって、パソコンを「味方」にしてしまえば、パソコン克服はおわりだ、と述べていたように、「初め」の「ああ、なんとかひけるじゃん/あれ?やっぱりうまくならないなあ」という「分水嶺」を「成功側」に着地すれば、ほとんど勝負はおわり(勝ち)だ。

では、エレキについての「はじめの分水嶺」を「勝ち側」にいたる道はなにか。ここで、私の実際と推奨はちょっと異なる。私はエレキでメロディをひくのが好きなので、ほとんどもっぱらメロディをひいているが、ギターの指板は、小学校からならっている五線譜とちょっと構造が異なっているので挫折しやすいかもしれない。

それよりも、多くの本で、推奨されている、「パワーコード弾き」を強く推奨する。

「パワーコード」弾きは、小学校以来の正統的楽典(?)からみると、ちょっと、想像を絶する簡単さだ。

コードというとおり、それは和音なのだが、五線譜でみる「だんご三兄弟」すなわち、一度・三度・五度からできている和音のうち、「三度」の音を省略してしまうのである！

エレキの音は多くの場合「歪ま」せるので、三つ音をならすと「重すぎる」場合がおおい。それで、音を「整理」するのだが、なんと「三度」を落とすのだ。

三度の音を省略するのが、なぜ、驚くべきかという、そのために、和音の「メジャー/マイナー」の区別がなくなってしまうからだ。

このあたりは、分かっているヒトには自明だし、知らないヒトにはちょっとややこしいので、適宜とばして読んでいただければ十分だ。

すなわち、C（ド）のパワーコードを弾くときには、C（ド）と（上の5度にあたる）G（ソ）だけを押さえてならせばいい。Gのコードを弾くときには、同様に、GとD（レ）を押さえて鳴らせばいい。2弦と3弦だけ調律間隔が違うので例外だが、それ以外の場合は、たとえば、Gならば、自分の目線からみて手前の「6弦の3フレットを人差し指」で、それより奥の「5弦の5フレットを薬指か小指」で、押さえて弾けばよい。

三度の和音を省いているので、一度と完全5度の音の二音を弾くだけである。したがって、上記の「2弦と3弦を共弾する場合」以外は、上記の「手前の弦のコードのルート音を人差し指で押え、その次の奥の弦の二フレット下を薬指でおさえる」だけで、「指の形」はまったく変える必要がない。

【ピアノ難民のための、最廉価で「ピアノっぽいことを楽しむ」、

サルベージョン】

以上、おもに、エレキギターをめぐる述べてきたが、以下数節、「ピアノ」難民をいかに救済するかについて述べてみたい。いわば、「ピアノ難民のための、最廉価ピアノ入門」である。

と、いうと、読者の多くは、学術論文のなかで、そんなことを書くのは変だ、とおもわれるかもしれない。

しかし、単純に強く言ってしまえば、そのような違和感こそ、文化資本の多寡による差別化という暗黙のメカニズムがもっている「虚偽意識」に目眩ましされているのだ、と思う。

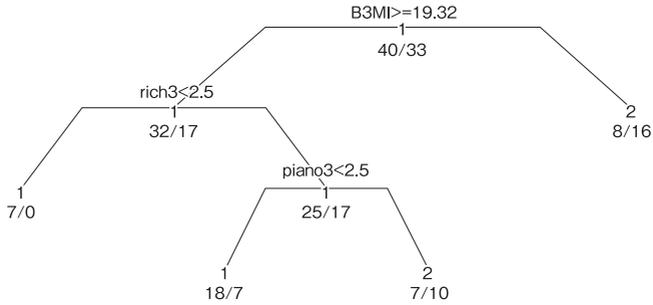
現代日本において、「ピアノ」習得は、文化資本、あるいは、そのシグナル（指標）として、否定しがたい効果をもっている。

私がおこなった、小規模な調査においても、その点は、支持される。（以下）

【比較的肥満者に、恋へは、「貧富」そしてその次に「ピアノ」の壁がある】

以下は、2009年夏学期南九州のある国立大学法人のクラスで私がおこなった、小規模なネットワークリサーチのデータを、ディジションツリー分析したものである。

以下は、恋愛（恋人の有=2,無=1）を基準変数（ターゲット）として、「第一の友人の恋愛、本人BMI(ボディマスインデックス・肥満度)、性別、ピアノのお稽古年数、容姿（自己申告）、経済的豊かさ、ウエストのしまり（自己申告）」らを説明変数に入力したものである。



以上のように、結果として、BMI、経済的豊かさ、ピアノ、のみが、有意なものとして出力された。

上の「さかさ樹形図」からみてとれるように、

まず第一の分水嶺は、「 $B3MI \geq 19.325$ 」である。これ未満の人は、すぐさま「2 = 恋人いる」であがりである（実測値は、上図のように、「いない = 8人/いる = 16人」）。

「以上」の人は、左の分枝にすすむ。

次の分水嶺は、「経済的豊かさ」。主観的自己申告で、7段階回答。2.5点未満の人は、「左」にすすんで「恋人いない」（実測値も、全員7人「いない」）で上がり。

「以上」の人は右の分枝にすすむ。

次に、「ピアノ年数」の分水嶺が待ちかまえている。図には、「piano3< 2.5」とあるが、ウェブアンケート上では「0年」から選択肢がはじまっているので、実際には「3.5年未満」の人が「左」にすすんで、「1 = 恋人いない」で上がり（ただし、実測値は、「いない = 18人/いる = 7人」）。

「3.5年以上」の人が右にすすんで、「2 = 恋人いる」で上がり（ただし、実測値は、「いない = 7人/いる = 10人」）。

以上は、あくまで、小規模なパイロットリサーチのデータの分析に過ぎない。これをもって、日本全体の傾向を語ることはできないだろう。しかし、ここにおいて調査したサンプルだけが、とりわけ、ピアノのお稽古年数が、恋人の有無に（他の条件をともなったもとだが）影響していた、とは考えにくい。

日本全体においても、ピアノのお稽古年数が、恋愛、ひいては婚姻に、なんらかの影響をあたえているという仮説は有力となるだろう。

多くの母親が、自分の娘にピアノをさせることを選好していることからみて、その母親たちが、たとえ暗黙においてであっても、ピアノの文化資本的「価値」を「知っている」のは、ありそうなことだ。

そして、そのようにさせなかった母親、そのように「しなかった」ひとたちのすくなくならずも、そのことを暗黙に「知っている」というのもありそうなことだろう。

しかし、「たかが、ピアノ、、、」とおもわれるだろう。これこそが、文化資本がもっている「わな」である。あるいは、暗黙には、少なくとも価値をもちつつも、「たかが、〇〇、、、」と思われやすいことがら、こそが、文化資本の差別化メカニズムにおいて、選択（淘汰）されやすいのだ、といってもいいだろう。

したがって、ピアノをやったかやらなかったか、できるかできないか、は、「たかが」の瑣末なことがらと思われがちだが、文化の社会学的には、些末なことがらとは言えないと考える。(ある国の皇后は、先日、プロの弦楽奏者たちと、ピアノの「協奏」を楽しまれ、それは、その国のテレビでも放送された)。

それで、そのような「ピアノをさせられなかった、できない」ひとたちを、ちょっと、サルベージン(救済)してみようというわけだ。

【どんな「ピアノ」を買う、か？】

そもそも、ピアノが、高価であった(ある)こと自体が、上記のような文化資本の差異化ゲームの「ネタ」としてピアノが選択された(淘汰された)理由の一つ(あくまで一つ)だろう。

いうまでもなく、この点も大きく変化している。いわゆるエレピやデジタルピアノが、高性能化・廉価化していることは、多くの方がご存知だろう。

ただ、この方面は急速に事態が変化するので、デジタルピアノといっても数万円以上するものを購入するのはおすすめしない。以下のようなサルベージン案をお示しするが、100%の確率で、「挫折しない保証」はないからだ。

たとえ、数万円であっても、自宅に、値が張り(そうであるが故に廃棄しにくく)、目障りな大きさのもので、しかも、「それを使いこなすのが挫折した」ものがあると、それがトラウマとなって、以後、いよいよその方面に、お金の面でも・手間の面でも、「投資」するのがこわくなってしまう。

ここは、「安くて・小さい」ものをおすすめする。

最も推奨するのは、上記でもふれた、「USB接続 MIDIキーボード」だ。ただし、あとあとのこともあるので、鍵の大きさはピアノと同じ「標準鍵盤」が理想だろう。まあ、50鍵ほどあれば理想だろう。

アマゾンのレビューにおいても、(前述の、SONAR 8.5 LEが、同梱されていたの(以下キーボードA)とは、別のメーカーの類品についてだが)、以下のようなコメントがある。

「ピアノ遊びにも最適, 2009/9/16

4オクターブありますとちょっとしたピアノ遊びもできますし商品付属のソフト音源もなかなか良い音なので、本格的なピアノ演奏及び練習じゃなければPCをちょっとしたヴァーチャルピアノとして楽しむこともできますね。」

ただ、上記のキーボードA(と、その同梱ソフト)にしても、パソコンにソフトをインストールして、キーボードをつないでも、音ができるまでの設定が、はじめは、意外にわかりにくい。

また、同梱ソフトが満足のいかない場合もあるだろう。

そのような場合でも、上記のとおり、無料のMIDIシーケンサーソフト(Dominoなど)をインストールすればいい。(ただし、Dominoも、音源の指定はしなければならない。音源は、パソコンにすでに入っている。詳しくは関連ウェブページなどをご覧ください)。

【ピアノを「弾く」！】

人生何十年も生きて行くと、「ああ、結局、大人たちって、示し合わせたように、『美しい嘘』を、かたってきたのだなあ」と、つくづく気づくことが少なくないものである（英会話とか、..）。

ピアノについても、同様な感慨にひたっているこの頃である。英会話がこんなにも、むずかしく、ピアノを（とりあえず）弾くのが、こんなにも、やさしいだなんて、つくづく、大人たちにダマされてきた気分である。

もちろん、プロ並みになるのは、いずれにせよ容易ではない。が、ピアノも英会話もプロになるひとなどごく少数なのだから、一般人など、「普通免許なみ」で、十分すぎると思う。

しかし、「自動車の普通免許なみ」の覚悟でピアノが弾けるようになるなんて、（一万語、単語をおぼえなければ、英会話などなんの実用性もない、なんて）、「本当の秘密」が、ばれてしまったら、ピアノ教師は困るだろう（し、「英会話産業」も、（逆方向だが）、困るだろう）。

だから、「ピアノがこんなにも容易だ」（英会話がこんなにも大変だ）とは、「業界人」はいわない。

ピアノは教師について、「正式」にならって、「正式に」弾かなければいけないかのように、暗黙にそんな雰囲気にしてしまう。（まさに、ディスタクシオンのわなである）。

いうまでもなく、自分で買ったピアノ、どう弾こうが、ウチの勝手だ。

日本中で、「弾かれなくなったピアノ（引かれなくなった百科事典も？）」ごろごろしているのだから、正式であろうがなかろうが、それで楽しんだほうが、「資源の有効利用」だろう。

【コード弾き】

では、具体的には、どう弾くのか。これまた、ご存じの方はご存じのとおり、コード弾きである。

よく「歌本」で、歌詞の肩に、コード記号があって、ギターなどで、それを弾くように、ピアノでも、コードを叩いていくわけだ。（右手でメロディ、左手でコード、が、基本）。

ピアノができないひとが、「ピアノができるひとが、両手で、ピアノを弾いている」のをみると、「すごいなあ、いいなあ。片手でメロディをなぞるぐらいならともかく、左手と右手を協奏させるなんて！ 「小さい頃」から、「正式に先生に指導」してもらって、「すごく練習」しないとできるようにならないんだろうなあ。もう、わたしの「生涯」では、できるように、ならないんだろうなあ」とおもうだろう。

むかし「もしもピアノが弾けたなら」という歌もあった。「だけど、、、聞かせる腕もない」と歌う。それほど、ピアノが弾けない人からは、「ピアノが弾ける」というのは、憧れの境地に見えるだろう、（弾けない私（桜井）からも、そうみえた）。

しかし、なんのことはない、「左手は、コード（和音）」を叩けば、とりあえず、いいのだ。

最近、小室哲哉のインタビュー記事を読んでいたら、小室哲哉も、ほとんどの場合、右手でコード、左手でベース音を、弾いているだけ！ だったそうだ（小室2010）。

なーんだ。「みんな、だまってようなー」とでもいうべき「大人たちのうそ」に、永年だまされてきた気分である。

このようなコード弾きは、ピアノが「できる人」が楽しんで弾くときは、かなりやられていたようだが、初心者から、「はじめから、コード弾き」させるといふ奏法方略は、比較的最近「表面化」したようだ。

書籍では、

『はじめよう!ピアノでコード弾き CD付 (リットーミュージック・ムックーキーボード・マガジン)』(野村美樹子・坂本 剛毅)

と、

『アフターファイブレッスン お父さんのためのピアノ教室 体験的コード奏法超入門』

などの、の一連の著作などがそれである。

しかし、私にいわせれば、両者ともに、「すぐむずかしく」になってしまう。せっかく、はいりやすい「コード弾き」を唱導しているのに、「左手コード、右手メロディ」という基本から、すぐに「両手の協奏」へと進んでしまう。

おそらく、「左手コード、右手メロディ」という、基本的なコード弾きは、「本のページ数を稼ぐにはやさしすぎる」のではないだろうか。

左手でコード（和音）、右手でメロディを弾きましょう、と指導したあと

は、延々と、二段になっているピアノ譜は不要で、ギターのようなコード記号がふつであるメロディ譜一段を載せる以外に必要ななくなってしまうのだろう。

それでは、ちょっと、商品としては（楽譜ならびに、楽譜がのっている書籍は、比較的高価である）、金を取りにくい。

それで、ついつい、「もうちょっとむずかしい」ことを書いてページ数をかせいでしまうのではないか。

ピアノのコード弾きについては、もうひとり（ひとつ）、中心的な情報発信者が存在する。ネット上の、

mamopage “ピアノコードの弾き方がよくわかる、簡単伴奏”

である。

ここでは、展開型による簡単なコードの押さえ方、四音和音は、すべて、「簡略」な三音和音に変換（「ダイエット」）して教示、ひとつにキーに対応するさまざまな応用的コード（dim とかagu とか、、、）を、メジャー、マイナー、セブンスに大胆に「たくさんのコードもたった3つにまとめ」てしまう、

内容はほとんどこれに尽きている。

私（桜井）自身、このサイトによって、「救済」された！

おしえるべきことの「少なさ」は、このようなインターネットサイトにあっていたのだろう。

「本」や「先生」はつつい、「もっと先」まで、教えようとしてしまう。しかし、生徒は当然、そんなはやくは習熟しない。

そのため、生徒は、「わたしはこんなに、できなくて、、、」となやんでしまう。

しかし、上記ネットサイトは、ただ、「左手でコード、右手でメロディ」を推奨している「だけ」である。

閲覧者は、不安にかんじることなく、いつまでもコード弾きを楽しんでいくことができる。

「書籍」や「ピアノ教師」といった、旧来のメディア・ビジネスモデルにおいては、そのビジネスモデルとは適合していなかったゆえに、「ピアノは、コード弾きすれば、簡単だし、それだけでもいいのだ」という「ホント」が、大人の不作為のウソによって、流通しなかった。それによって、ピアノは、「教え手」と「教わり手」をつくりだす「距離」の源泉となっていた。

しかし、インターネットという、あたらしいメディアによって、旧来のビジネスモデルはゆるがせられつつあり、旧来のビジネスモデルでは、流通しにくかった「ホント」が、流通しはじめつつあるのかもしれない。(もちろん、本稿もその萌芽の流れを、さらに励起しようとしているのだ)。

【自分の声で歌え?!ーバイオダーウィニズム的幻滅から、
バイオダーウィニズム的救済（悟り）へ?】

ダニエル・ネトルという、人類学者・心理学者がいる。

彼は十数年まえは、言語人類学者として、「消え行く言語」などを研究し、「ヒトの言語は、サルの子毛づくろいのようなものだ」と主張するダーウィン主義霊長類学者・ロビンダンバーと共著で、「ヒトの言語が、方言化（差異化）するのは、よそ者を見分けるためのソーシャルマーカ―としての機能があるからである」という仮説を再現するようなコンピュータシミュレーションモデルについての論文をかいていたりしていた。

そんな彼だが、ここ数年は、心理学者に転じたようだ。

パーソナリティ心理学のいわゆる「ビッグファイブ仮説」の本を出版した (Nettle 2007=2009)。

ただし、基本的スタンスは、以前とかわらず、バイオダーウィニストである。すなわち生物としての「再生産と自然選択と突然変異」の結果、現在の諸生物、つまり、われわれ人類も生存している、と考える。

ビッグファイブ仮説とは、ヒトのパーソナリティ（人格）は、五つの基本属性ならびに、その合成によってなりたっている、という仮説だ。

国語・算数・理科・社会・英語、では、もちろんないが、そのような「五つの基本属性」について、人々は、スコア（点数）をもっており、そのスコアの組み合わせでもって、そのヒトの人格は記述できる、という仮説である。数学的には、基本属性を要素とするところの一つの「5次元ベクトル」として、ヒトの人格は、記述できる、となるわけだ。

一見複雑でつかみどころのない、ヒトの人格が、じつは、五つの基本因子によってなりたっていると主張（仮説）し、さまざまな実証によって、これをテストしている。

また、よく話題になる生得的か環境による影響か、では、ヒトの性格の約半分程度は、生得的なものと評定される。

このような認識は、ヒトが抱きがちないくつかの幻想に、幻滅をせまるものであると言えそうだ。

その幻滅はおもに、三つあるのではないか。

第一は、いわば、無限性についての幻滅である。むかし、梅棹忠夫が、『知的生産の技術』のなかで、ひとは、どこか無限の世界とつながっていたいという欲望をもっている。それにたいして、自分のアイデアなどを、カードとして、「これだけ」として、目の前に尽くしてしまうと、いいようのないような寂しさをひとはかんじるようだ、といったことを述べていたことがある。人格の「無限の複雑性」についても、似たようなことが言えそうだ。

多くのひとは、他人や、とくに自分の人格が、無限に複雑であることに、一種の希望のようなものを感じがちだ。

しかし、ビッグファイブ仮説はこの希望を否定する。ヒトの人格は、五つの基本因子のスコアの組み合わせでしかない。

第二は、いわば、確定性についての幻滅である。人格の約半分が、生得的にきまってしまうている、、、。このような一種の本能説に反感をもつひとは、いまでも、少なくないのかもしれない。

しかし、上記の第一の点も、第二の点も、事実の問題である。最近、ビッグファイブ仮説は、エビデンスを蓄積させつつある。今後も、さらにこの仮説がこの二点について、エビデンスを蓄積させ、確からしさを増していったら、事実として認めざるを得なくなるだろう。

第一の幻滅についてだが、たとえば、すこしずれたアナロジーだが、ポーカーでも想起してみよう。ご存知のようにポーカーは「5枚」のカードを手札として、その組み合わせで競いあうゲームである。もちろん、その組み合わせは、有限個なのだが、われわれの能力に比すれば「十分に楽しめるほど複雑」である。ビッグファイブ仮説についても似たようなものとかんがえてみてはどうだろうか。たしかにその組み合わせの結果は無限ではない。しかし、それは、われわれが、人生や社会を「楽しむ」には十分複雑なのではないか、と。

第二の幻滅について。これはわれわれが生物である以上、ほとんどあたりまえな制約なのではないか。われわれヒトは、チーターのように速く走ることもできなければ、鳥のように体ひとつで飛翔することもできない。そのことをほとんどのヒトは幻滅とも苦痛とも感じ無い。それと同様な「制約」がすべてのヒトも、生得的に課されているとかんがえてみてはどうだろうか。

この第二の幻滅が苦痛である場合があるのは、次に述べる第三の幻滅と関連しているがゆえにである、場合がほとんどである、と私は見通す。

第三は、いわば、優秀性についての幻滅である。ダーウィニズムは、それが生まれて以来「適者生存」「弱肉強食」「優生思想」などと結びつけて語られ、さらには社会ダーウィニズムに結びつけて語られ、そうであるがゆえに、ある種の人々から忌避されてきた。

しかし、ここにおいてはバイオダーウィニズムについて、大きな誤解が存在していたように思われる。二点、理解のポイントがある。

すなわち、第一に、「適者生存」についてだが、生物進化の長い歴史に鑑みれば、現在生存している者たちは、「すべて適者」である。自然淘汰の長いフィルタリングを経てきた「生き残り」なのである、われわれの血統はすべて。現在生存している血統は、すべて、ダーウィン適応度において、ほとんど違いない、と強く推測できる。

第二のポイントは、ある属性の遺伝率をめぐってである。たとえば、政治的他者依存態度が、ある割合で、遺伝していることが推計できたとしよう。とすると、バイオダーウィニズムの発想法になれていないヒトは、「政治的に他者に依存することがいったいどのような適応価をもつのか」と考えがちである。こうかんがえるのは、完全な間違いではないのだが、非常に誤解を招きやすい。まず、経験科学的に（100%でない）遺伝率を計測できるのは、当該の種のなかで、分布がかぎられている（100%でない）属性である。そもそも、種のなかで、その属性について、「ばらつき」がなければ、遺伝率は計測できない。哺乳類のある特定の「種」の目が二つある、というような、例外事例でなければ100%なりになってしまうようなことがらでは、通常の意味の遺伝率は計測できない。遺伝率が計測できるのは、「政治的他者依存性があるひともいれば」、逆に「政治的自律性も高い人もいる」といったような、「ばらけた」属性である。

とすれば、「政治的に他者に依存することがいったいどのような適応価をもつのか」と問うのは、かなり危険である。なぜなら、そのような問い方は暗黙に、「政治的に他者に依存することは、そうでないことと比べて、いったいどのような適応価をもつのか」を含意してしまうことがほとんどだからだ。

「政治的他者依存性があるひと」と「政治的自律性も高い人」の存在の比が、5：5なり3：7であったりしたとしよう。としたら、「この対立する一ペアの属性対が、このような比率で、遺伝するのは、どのような適応上の理由があったからなのか」がもっとも正しい問い方だろう。

その回答は、事例に即して探求するしかないが、進化論的ゲーム論の視点からみれば、探求の順番上一番初めにくる仮説は、この比率は、いわゆる「タカ-ハト」ゲームにおけるタカ戦略とハト戦略の均衡比率と同様に、頻度依存効果がはたらいて、均衡比率がなりたっているのではないか、というものだろう。

ビッグファイブの個々の属性についても、同じことがいえるだろう。たとえば、外向性という属性のあなたのスコアがある値であり、その遺伝率がある値であったとしよう。いちばんありそうなことは、あなたの祖先が生き抜いてきた環境・社会においては、まわりのヒトたちの外向性の全体のばらつきなかで、あなたの祖先は、外向性のそのスコアをとることが最も、有利だった、ということだろう。これは他の四つの属性についても同様にいえる。(厳密には、五つの属性のコンビネーション（相互作用）の問題がある。が、単純化のため、ここでは捨象する)。

単純に言ってしまうえば、あなたのビッグファイブのそれぞれのスコアは、「環境選択の最適な結果」といえるのだ。

もちろん、これは、あなたの先祖までのはなしだ。ただいま現在の環境・社会のなかで、あなたのビッグファイブのスコアの組み合わせが、なんらかの意味で「最適」である保証はまったくない。世間の評判の観点からして、あるいは、あなた個人の効用（幸福感）の観点からいって、あなたの手持ちのビッグファイブの「持ち手のスコアの組み合わせ」が「不利」であること

は大いにありうる。

ただ、そのような現在の「有利不利」が、以上のようななんらかの、価値評価尺度に依存していることは大いに自覚したほうがいだろう。

以上のような第三の幻滅が、第二の幻滅を、幻滅たらしめている原因にもなっていると、思うのだ。すなわち、われわれにビッグファイブとして「配られるカード」は所与（自分にはどうにもならず、かつ、確定）、である。

しかし、このようなことは、世界では多くの場合つきものであり、このこと自体嘆いてもしょうがない。

しかし、これに上記の「第三の幻滅（誤解）」が付け加わるのだ。すなわち、ビッグファイブとして、「配られる五つのカードのそれぞれの値、ならびに、その組み合わせの値」は「不利」なものなのではないか、と。

しかし、このような懸念は、長期的な進化史に鑑みると、誤解である可能性がたかいのであった。なぜなら、あなたがいま配られたとしてうけとっている遺伝的「カード」は、それ自体(変異を捨象すれば)、「適者が生存」した結果であるはずだからだ。

もちろん、くりかえすが、だからといって、これらの「遺伝カード」の組み合わせが、現在の社会の主流的な価値評価尺度、あるいはあなた個人の価値評価尺度ないし効用関数からみて、「最適」であるとはかぎらないのだが。

このような状況にかんがみて、ネトルは、「自分の声で歌え」という。いわば、自分もっている（というか祖先と環境から継承された）器官（群）で、奏でられる楽曲を奏でよ、ということだろう。

そして、そこで奏でられたものは、長期的な進化史の視点からすると、それはそれなりに「最適」なものである蓋然性が、高い。

(これまたくりかえしていうまでないが、だからといって、これらの自分の歌える歌が、現在の社会の主流的な価値評価尺度、あるいはあなた個人の価値評価尺度ないし効用関数からみて、「最適」であるとはかぎらないのだが。)

私はこのネトルの主張にまったく賛成だ。

しかし、さらに付け加えれば、「歌える声で歌え」という命題は、上記以上の含意を今日ではもちうる、とおもう。それが、以上で述べてきたことをふまえた、本稿の結論である（次節）。

【ディスタンクシオンの由来・幻滅から、バイオダーウィニスト的諦念・悟り？へ】

そもそも、ある種の生物たちがおこなう「歌を歌う」という行動のバイオダーウィニズム視点からの由来を、まず、かんがえ、

それが、ヒトの「有史以来」の社会において、どう、「換骨奪胎」的に機能してきたをか概観的に仮説してみよう。

まず、ヒトという生物が、歌をうたったり、曲を奏でるのはなぜかという問に対する回答を思弁してみよう。バイオダーウィニズムの視点からすれば、チームで狩りをするばあいの統制・景気付けなどレアケースをのぞけば、性淘汰による、ということになるだろう。つまり、それなしでは判定できない「適応度」の高さを示すシグナリングとして、コストのかかることをやってみせ、異性に対して自分がどれほど適応度がたかい個体であることを示す行為といえるだろう。

ただし、以上のストーリーは、EEAにたいしてまでしかなりたたない。EEAと、「有史以来」あるいは「近現代社会」とでは、まったく環境が異なる。EEAにおいて、異性に好まれた行為が、あたらしい環境での適応価をシグナルしている保証はない（というか、必然的にはシグナルしていない）。

しかし、ヒトビトの好みはEEA以後の環境にあっても、完全に変わるとはかぎらない。一種の遺物として残ってしまう場合がおおい。

しかし、その遺物をまさに「前フェーズの結果として、それを一種のフォーカルポイント（焦点）として」新しいゲームがはじまりそれが再生産されていくことがある。

日本の近現代における「ピアノ」はその一例だと私は考える。現代社会において、「妻がピアノが上手」であろうとなかろうと、彼女がプロのピアニストで多大な収入を得られる場合以外は、夫の効用はほとんど増加しないだろう。しかし、ピアノは、それ自体がある程度高価で、その習得にはかなりの程度の手間暇カネがかかる。

したがって、結婚マーケットにおいて、ピアノは、「その女性が、いいところのお嬢さん」であることを示すシグナリングとして、機能してしまう。

すなわち、ブルデューのいうところの、「ディスタンクシオン（差別化）」の装置として機能してしまう。

しかし、そこで奏でられる曲は、奏でる方にとって、楽しいものである保証はない（必然的には楽しくない）。多くの場合「いやいやピアノを習得した母」が、「いやいややっている娘」にむりじいしているというパタンだろう。「おけいこ」と発表会の前、あるいは、娘の「適齢年齢」時代以外には、

ピアノは、ホコリの下、というパタンだろう。

もちろん、このことは、これなりに、社会的に合理的、であったのだろう。であるから、今日の日本においても、このような図式は保持されてきたといえそうだ。

おそらく、このような「正統文化」「女の文化」に対抗するものとして、「対抗文化」「男の文化」として、エレキギターなどによるいわゆる「ロック」音楽が立ち位置を占めてきたのだろう。

ピアノ（に類するもの）は、廉価化したがる、その習得は、いまだ、手間暇カネ教師が必要であると、「共犯的なウソ」が流通している。エレキギターにかんしても程度は低いが同様な「敷居」が存在していただろう。

本稿で指摘してきたのは、そのような「敷居」がかぎりなく、低くなりつつある、ということだ。そして、「ピアノ入門」と「エレキ入門」によって、本稿自体その敷居を低くする一助たりえようとした。

本稿が述べるように、このような「敷居の低下」が極限まですすめば、どうなるか。おもに、二つ指摘できる。

第一は、シグナリングの「くびき」からの音楽の解放である。よい配偶者を得るため、うちの家格を保持するため、といったような、いやいやながらの理由で、音楽をいやいややる必要がなくなる。やりたいひとだけが、やりたい楽器・楽曲を、やりたいだけやれば、よくなる。

第二は、このコイン裏面となるが、シグナリングとしての効用はなくなる。「趣味は実益を兼ねなく」なる。あなたが、好きな音楽を奏でたとしてもなん

の得にもならない。もっとも、「一般的尺度における高い階級」へのシグナリングにはならなくても、「ぼくは、一般には、ちょっと変とおもわれているけど、こんな音楽がすきなんだ。同好のものよっておいで、、、」とでもいうような「蓼食う虫も好き好き」的な「棲み分け」的「割れ鍋にとじ蓋」的シグナリングにはなる可能性はあるが。

【「華巖」化】

筆者は、むかし、インターネットがはじまったところに、時間空間の「華巖」化、といったことを考えたことがある(桜井1996)(ここでの「華巖」思想の理解は、おもに、井筒 1989 のなかのIならびにII によっている)。これについて、説明するより、当時考えていたことと、ほとんど同じようなことが、佐々木俊尚の『電子書籍の衝撃』を読んでいたら、音楽について、「実際に起きていた」ので、おどろいた。それを、紹介したほうが、読者にはわかりやすいだろう。

佐々木は、ブライアン・イーノの、インタビューを紹介する。(佐々木 2010: 50より孫引き)

「私(イーノ)の娘たちはそれぞれ、五万枚のアルバムを持っている。、、、彼女たちは何が現在のもので何が昔のものなのかよく知らないんだ。たとえば、数日前の夜、彼女たちがプログレッシブ・ロックかなにかを聴いていて、私が『おや、これが出たときは皆、すごかつまらないと言っていたことを思い出したよ』と言うと、彼女は『え?、じゃあこれって古いの?』と言ったんだ(笑)。彼女やあの世代の多くの人にとっては、すべてが現在に属している、“リバイバル”というのは同じ意味ではないんだ」

ここでは、イーノや佐々木が言うように、過去の無数の音楽が、「彼女」た

ちにとって、時間的距離の違いが無意味なようになっている。

「彼女」らは、五万枚ものアルバムに容易にほとんど瞬時にアクセスできるのだから、無数の過去の音楽は、「彼女」らにとって、等しくほとんど無距離となっているともいえるだろう。

インターネットによって、ネット上のコミュニケーションが、「ドラえもん のどこでもドア」のように、「空間的距離が無化」しつつあるとはよく指摘されることである。

上記の事例では、(未来に向けて、は、のぞくが)、「時間的距離」が、無化しつつあるのをみてとることができただろう。

本稿においては、おもに、音楽の「作り手」と「聞き手」との距離、というか、非対称性が、弱化していく傾向を、いくつか指摘できたかとおもう。

多くの場合は、音楽は「聞くだけ」よりも「作るほう」が楽しいと思う。

しかし、中程度の過去以来(だいたい、いわゆる近・現代)においては、上記の「非対称性」(以外にももちろん原因はあろうが)などによる「作者側の稀少性」によって(もちろん、それ以外の原因もあろうが)、「聞き手」が「作り手」に報酬を支払ってきた。

後者のほうが、「より楽しんでいる」場合も少なくないのに。

この「享楽の大小」と「報償の向き」との「ねじれ」は、私の知る限りほとんど論じられてこなかった。が、とくに「聞き手」の方に、いわゆる「抑圧されたもの」としてのいわゆる欲求不満をもたらしてきた可能性が大きいと思う。

疎外論的物言いを使えば、このような「抑圧（されたもの）」が、「解放」される時期がちかづいているといえるかもしれない。

以上の「抑圧の解放」はおいておくにしても、作り手と受け手の非対称性によるへだたりが、無距離化しつつあるとはいえるのではないか。

これが、われわれの文化や社会になにを効果としてもたらすのか、そのすべてを今みとおすことはできない。

おそらく、いわゆる「著作権」に関する旧来の観念も、上記の「非対称性・距離」を暗黙の前提にさせていただこう。

その「旧来の観念」も変更を余儀なくされるかもしれない。

いや、「著作権」観念の変化は、まだ「些末」な領野かもしれない。

それ以上の、暗黙・当たり前であったがゆえに見えなかった領野、の変化が、やってきつつあるのかもしれない。

[レフェレンス]

an弾手 2004 『アフターファイブレッスン お父さんのためのピアノ教室 体験的コード奏法超入門』 ドレミ楽譜出版社

藤本健・大坪知樹 2010 『BASIC MASTER SONAR 8.5 LE』 ビー・エヌ・エヌ新社

井手口彰典 2009 『ネットワーク・ミュージッキング:「参照の時代」の音楽文化』 勁草書房

井筒俊彦 1989 『コスモスとアンチコスモス:東洋哲学のために』 岩波書店

小室哲哉 2010 「ロングインタビュー」2010年7月号 『キーボード・マガジン』

Mitchell 1968=1987 下田直春監訳 『新社会学辞典』 新泉社

野口悠紀雄 1993 『「超」整理法:情報検索と発想の新システム』 中央公論社

Nesse・Williams 1994=2001 長谷川真理子;長谷川寿一;青木千里 訳 『病気はなぜ、あるのか:進化医学による新しい理解』 新曜社

Nettle, Daniel 2007=2009 竹内和世訳 『パーソナリティを科学する:特性5因子であなたがわかる』 白揚社

野村美樹子・坂本剛毅 2005 『はじめよう!ピアノでコード弾き』 リットーミュージック

佐々木俊尚 2010 『電子書籍の衝撃:本はいかに崩壊し、いかに復活するか?』 デイスクヴァー・トゥエンティワン

田中義久 1988 「文化」 見田宗介, 栗原彬, 田中義久編 『社会学事典』 弘文堂

梅棹忠夫 1969 『知的生産の技術』 岩波書店

http://www.amazon.co.jp/M-AUDIO-USB-MIDI%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%A9-KeyRig-MKEYRIG49/dp/B000NGG3HU/ref=sr_1_2?ie=UTF8&s=musical-instruments&qid=1290411380&sr=8-2

「クラシックロックとエレキギターが好きなおやじのブログ。」

<http://shekena-baby.sittoku.net/guitar/legend-lstx.html>

mamopage「ピアノコードの弾き方がよくわかる、簡単伴奏」

<http://www.geocities.jp/mamopage/>

桜井芳生 1996「キーワード案出階級と、時間空間の「華厳」化」

<http://homepage3.nifty.com/sakuraiyoshio/ansyutu.htm>

sakurai.yoshio@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/sakuraiyoshio/>

